

美術館・図書館 グランドオープン五周年記念公演

詩劇

花はくれない

入場無料

日時……二〇一六年 八月二〇日(土) 一三時三〇分—一五時(開場二三時)

会場……武蔵野美術大学美術館一階美術館ホール

〒一八七・八五〇五 東京都小平市小川町一・七三六 電話〇四二・三四二・六〇〇三

関連企画……二〇日 公演終了後に辻けい+三木弘和によるトーク(司会〓森山明子)

二二日 美術館ホールで「花はくれない」映像作品上映を予定

主催……武蔵野美術大学 美術館・図書館

監修……辻けい(美術家、東北芸術工科大学教授)

企画……森山明子(デザイン・ジャーナリスト、武蔵野美術大学教授)

協力……榎義明(デザイナー)、武蔵野美術大学教授)

演出……三木弘和(脚本家・演出家、東北福祉大学教授)

制作……一般社団法人地域舞台創造 I.M.s・劇団 I.M



あらすじ

明治十一年、女流探検家のイザベラ・バードは英国から船で日本にやって来た。横浜から新潟まわりで山形へと旅し、後に『日本奥地紀行』を著す。

しかしイザベラの旅行記には、山形の特産である最上紅花も、二百年ほど前に山形を旅した芭蕉の『奥の細道』も出てこない。それは何故なのか。古代エジプト原産とされ、日本でも赤の染料として稀少だった紅花ながら、明治は紅花不毛の時代だったのだ。

紅花は夏至から一日目の「半夏生」にまず一輪、黄色の花を咲かせるのだという。

この時期に、山形にあつて紅花の句を詠んだ芭蕉。

江戸で紅花染めの豪華な衣装を着る境遇から最上を下った遊女。

紅花の花餅から着想して傑作を残した二〇世紀のいけば作家。

そして、畑づくりが始まり、繭づくり、糸づくり、紅花染め、高機による平織を

一貫して手掛ける現代の染織人――。

一九世紀の旅人イザベラを「虚の中心」として、

一七、一八、二〇、二二世紀と、百年ごとに時を刻む「紅花人」たちが、

みずからの紅花体験と痛みを伴う生の来歴とを独白する。

登場人物同士が会話する場面はなく、舞台をつなぐのは紅花の物語と布だけである。

登場人物が一堂に会し、紅花に不死のメッセージを託して幕は下りる。

(脚本：森山明子、二〇一四年)

登場人物

旅人……イザベラ・バード(一八三二―一九〇二)

俳人……松尾芭蕉(一六四四―一九四)

遊女……遊女(一八世紀の人)

花人……中川幸夫(一九一八―二〇二二)

染織人……山岸幸一(一九四六―)

語り部ほか…男女複数人

紅花とその染めの工程

伊勢神宮の御神宝に残る「あか」の名は、紅、赤、緋、浅緋、深緋、薄柿色、蘇芳。

その色は、紅花、蘇芳、茜の根から得られた。

時代が下り、江戸時代の山形には米以外の産品として、茶、桑、漆、楮

それに麻、紅花、藍からなる「四木三草」があった。

紅花は、せんべい状の「花餅」となって京大坂へと渡っていき、

産地の女たちが紅花染めの衣を着ることはなかった。

最上紅花の最盛期には一八〇トンを生産したとの記録があるという。

明治二〇年代で染料としての栽培はほぼ終わり、戦前昭和期に再興され戦時下で断絶、

戦後は紅花の種を探すことから始まり、辛うじて生き延びた。

いま山形では白鷹町を筆頭に、年間一八〇キログラムほど収穫する。

春に種を蒔き、七月に咲く鮮黄色の花を摘むことで、紅花染めが始まる。

その工程は、早朝からの女たちによる花摘み、花洗い、花踏み、

花寝せまたは花蒸し、花搦き、さらには花餅づくり。

染めるのは寒の入りから二月の厳寒、午前四時ころに始め、陽が昇る前に終える。

染め場には紅の染液、鳥梅の灰、アカザ葉の灰汁に湯づけされた白い絹糸――。

人肌ほどの染液には湯気がゆらゆらと立ちのぼり、

清流で洗われた布は雪原にひるがえる。

キャスト 小林由佳(旅人)／菅野雅貴(俳人)／吉田優(遊女)／三木弘和(花人の声)／

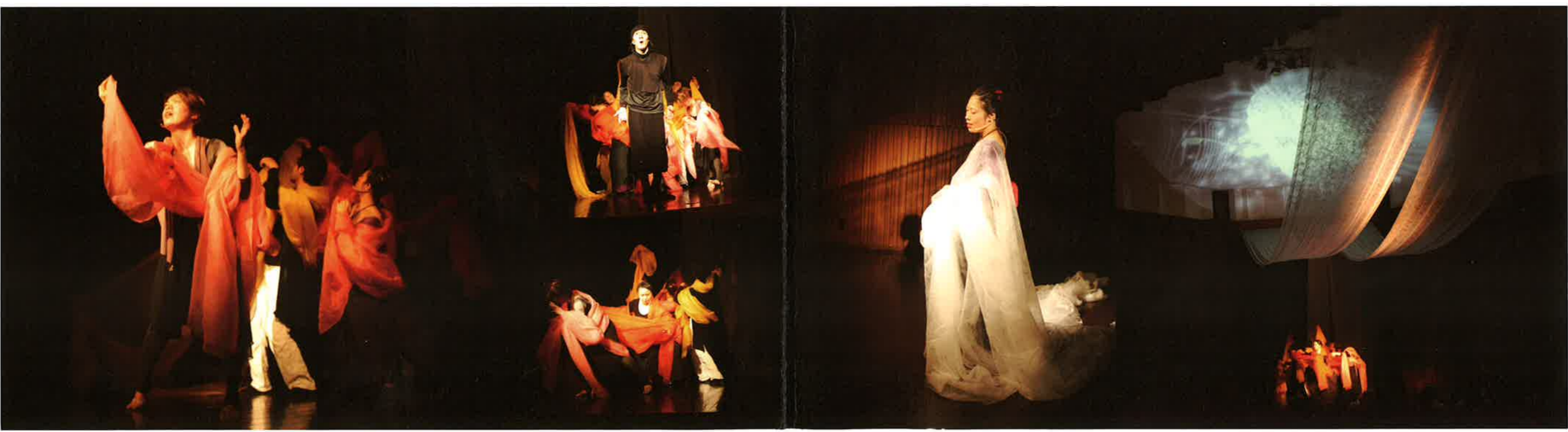
横山昌範(染織人)／三浦勇太(語り部)／中村まい(役備師)／吉田和子・森三桂(コソ)

スタッフ 舞台監督 奥山茂(株式会社ステージアンサンブル)／

照明 鵜飼啓三(ラソフワステージ株式会社)／音響 戸村匡志(トムラシステム有会社)／

撮影 八重樫利花・岡部まゆみ(劇団LW)／映像オペレーター 鈴木将彦(劇団LW)

*やむを得ない事情で変更になる場合があります。



監修……辻けい（美術家、東北芸術工科大学教授）



多摩美術大学大学院美術研究科修了。一九七八―八六年、舞台美術に参加する。一九八六年よりワールドワークによるインスタレーションを国内外で展開し、自己（染織した布）と時空（自然界の原理）との関わりを探索し続けている。二〇〇七年より現職。岩手県立美術館、国際芸術センター青森、カサヤの森現代美術館、ギャラリーエークワッド（竹中工務店東京本社）などで個展開催。本年は静岡市東海道広重美術館開催の「浮世絵のあか」に出展。

辻けいと「紅花ルネサンス」

東北芸術工科大学芸術学部美術科テキスタイルコースに着任翌年から、辻けいは「種からはじまる」をテーマに、畑を耕して種から栽培、冬に染培、「紅花プロジェクト」をコースの核に据えた。草木染研究家の山崎和樹、柳田哲雄と共に、そうした活動を大学の内外に広げるイベント「紅花ルネサンス」を開催している。二〇〇八年初回のテーマ「山形→未来」から

染織研究家の吉岡幸雄らが参加し、以降二〇一五年の八回目「山形→紅・光・水・身体→宇宙」まで、詩人の吉増剛造など多彩なゲストが参加している。これらの記録として『紅花白書0』がある。「花はくれない」は二〇一四年の「紅花ルネサンスvol.7」の一環として三木弘和演出で

同大学内에서도芸術教育研究センターこども劇場で公演したが初演。今回の舞台で使用する紅花染の布は、過去三回の公演と同様に東北芸術工科大学（学長／映画監督・根岸吉太郎）提供による。

演出……三木弘和（脚本家・演出家、東北福祉大学教授）



九州芸術工科大学（現・九州大学）芸術工学部卒業。本田技術研究所デザイン部勤務を経て、児童表現教育の研究と実践に従事する。一九九三年よりデザイン教育に携わり、舞台創作を開始。脚本・演出・作曲を担当し、舞台美術から映像、ポスター、チラシなどをデザイン監修、総合プロデュースをつとめる。二〇〇八年から現職、総合マネジメント学部所属。

一般社団法人地域舞台創造「M代表理事・劇団「M代表」。近年は、東日本大震災の被災地である大船渡などの公演開催地において舞台参加者を募って指導にあたる「地域創造市民参加型」の舞台づくりを実践している。主著は『子どもたちの不思議』『この地球に生まれて』。

主な公演作品には、「KAGUYA」「飛天」「月船の巫女物語」「Style Inn」「卑弥呼」「M musical」「花はくれない」「まな子と瞳」がある。

